

白百合女子大学 博士論文審査報告書

氏 名	森本 真由美
学 位 の 種 類	博士（心理学）
学 位 記 番 号	甲第 62 号
学位授与年月日	平成 31 年 2 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	主 題 祈りによる心の変容過程が宗教性発達に及ぼす影響の検討 副 題 ロヨラのイグナチオの『靈操』による宗教的意味システムの形成
論文審査委員	委員長 教授 篠田 勝英（本学教授） 主 査 教授 田島 信元（本学教授） 副 査 教授 秦野 悦子（本学教授） 副 査 教授 宮下 孝広（本学教授） 副 査 教授 西脇 良（南山大学教授）

論文内容の要旨

本研究は、心理学からみた宗教性発達について、実証的研究に基づき、その宗教性発達の諸相について調べ、発達の意義を検討するものである。心理学ではある宗教に対して信仰を持つという宗教性がどのように意識され、表出されるのかという過程を宗教的意味システムとして捉えることが出来る。とりわけ、意味システムが形成されていくプロセスを促進する「媒体」に注目して、どのようにして宗教性を帯びた人格が形成されるのかを見ていくことは、生涯発達という視点からも意義あるものと考えられる。

そこで本研究では、ある宗教の理解の深化をはかることは、他宗教を理解する手立てとなるという、ディルタイモデルに依拠し、特定の宗教・教団に限定しながらも、そこに特異的な心理過程であることを前提とした上で探索的にデータ収集を行い、第 1 に、宗教的意味システムのプロセスを検討すること、第 2 に、意味システム形成における媒体としての「祈り」、具体的には、本研究ではカトリック教会の黙想の一つである『靈操』に注目して、その構造と機能を明らかにすること、第 3 に、「祈り」の一般化としての宗教教育について検討する。「祈り」という媒体によって、どのような宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性発達に影響を及ぼすかを検討し、宗教的意味システム形成に関する発達モデルを仮説として生成することを全体目的とした。

序章では、宗教は意味を作り出そうとする人間の試みの一部であり、移ろいやすい意味の世界に生きている人間が、意味を生き、自己と世界の理解を解釈する方法であるとし、宗教的意味づけとそれによって何がもたらされるのかを先行研究を整理しながら、宗教性発達に関しての問題意識を述べた。世界や出来事に宗教的意味づけをしていく宗教性発達について検討することは、意味を作り出そうとし、意味の世界に生きる人間を理解するうえでも重要な問いであることを確認した。

第 1 章では、人生においての様々な出来事や節目に祈りに向かう動機と促進的記号の発生に関する仮説モデルを提示し、意味形成がどのように行われるのか、宗教性を帯びた人格がどのように形成されるのか、宗教的意味システム形成のプロセスを検討することを目的とした。**研究 1**では、カトリックの信仰を選んでいく径路を、非クリスチャン家庭で育ち、成人洗礼によりカトリック信者になった人々の語りを分析対象とし、TEA（複線経路・等至性アプローチ）の概念ツールを用いて記述・分析することで、宗教性発達の仮説モデルを生成し、宗教的意味形成のプロセ

スを検討した。その結果、祈りによる変容プロセスは「漸次的な回心」であり、統合的過程であることが示唆された。また、促進的記号発生の三層モデルにより、記号の読み解きである意味形成のプロセスで「同伴するイエス」という促進的記号が発生し、宗教的価値観への統合過程が示唆された。**研究 2**では、『靈操』の著者であるイグナチオ・デ・ロヨラの伝記資料を、TEA を用いた生育分析によって心理学的に考察し、個人と歴史の相互性の中から信仰を深め、信仰に生きる人の特徴を明らかにし、その宗教性発達を検討した。その結果、神への希求とその反対へと押しやるものとの葛藤は対話的自己による「識別」と解釈できた。また、この識別という習慣が、すべての出来事に神を見るという人格特性の形成に繋がっていることが示唆された。

第 2 章では、意味システム形成における『靈操』に注目して、その構造と機能を明らかにすることを目的とした。**研究 3**は、『靈操』のプログラム構造に連動して宗教的意味づけがどのように変容していくのか、黙想を介してどのような心の変容過程が担保されれば、宗教性発達が促進されるのか、について、プログラム評価と IPA（解釈学的、現象学的アプローチ）を用いた構造と機能、影響と効果の分析を通して検討した。その結果、『靈操』の構造は過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルであり、社会的視点調整能力の発達を促し、宗教的意味システムの形成を成すものであることが示唆された。**研究 4**は、『靈操』第 3, 4 週の「場所の設定」によって実存的な理解、宗教的意味づけがどのように深まるのかを、ドイツ、オーバーアマガウ村の人々を対象とした面接調査により検討した。その結果、『靈操』の第 3 週、第 4 週の宗教的体験に該当する 10 年毎の Passion Play の受難と復活の物語体験を通して「人間の尊厳と地球の尊厳」「寛容」「正義」「連帯」といった「地球市民の霊性」が培われていくことが示唆された。

第 3 章では、『靈操』の構造や機能の一般化ということで、イグナチオの霊的ビジョンを応用した教育を特徴に掲げる、イエズス会学校の教育の中の宗教性を検討することを目的とした。**研究 5**では、イエズス会学校の生徒に対して質問紙調査を行い、意味形成に影響を及ぼすと言われている自我体験の想起と人生の意味づけを検討した。その結果、高い想起体験率の回答が得られ、自我体験の語りの中に過去・現在・未来を移動するメンタルタイムトラベルや世界の中の自分という社会的視点調整能力の発達が示唆された。**研究 6**では、成人期・中年期・老年期になってから青年期を過ごしたイエズス会学校の教育的環境を振り返ったとき、どのような意味形成がおこなわれているのか、について、卒業生のエッセイをテキストマイニングでの分析を通して検討した。その結果、自分が世界と繋がっていることを体感できた経験と意味づけていることが見出された。これらの結果からイエズス会学校教育には自己を知り、世界の中の自分という他者に関かれた自己の確立の発芽が示唆された。

終章では、研究 1~6 で得られた知見に基づいて、祈りによる心の変容過程が宗教性発達に及ぼす影響について考察した。宗教的意味システム形成においては祈りが「媒体」として重要であり、祈りのプログラムの一つである『靈操』は宗教的意味システムの形成を媒介するもので、その構造と機能から明らかになったのは、心理学的に解釈に基づくと、過去・現在・未来、時空を超えるメンタルタイムトラベルであり、社会的視点調整能力の発達を促すものであった。『靈操』が一般化された教育の場においても、メンタルタイムトラベルや社会的視点調整能力の発達が促され、日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、人生の意味と目的の追究に関わる問いに繋げていっており、そのことは自己を知り、他者に関かれた自己、共通善に向かうものであることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

審査を通して認められた本研究のもつ成果と意義、および課題は、次の通りであった。

（１）宗教性発達を意味システムの形成過程として捉え、その発達モデルの生成と検証を行ったことの意義

本研究では、宗教的意味システムの形成プロセスを検討し、意味システム形成を媒介すると考えられる「祈り」に注目して、その構造と機能を明らかにした。さらに「祈り」の一般化としての宗教教育の成果と生涯発達に渡る影響のあり方について検討がなされた。その結果、「祈り」という媒体によって、宗教的意味形成、意味価値が生じ、宗教性の生涯発達に影響を及ぼすことが示唆された。その上で、宗教的意味システム形成の発達モデルについて仮説をたて、検証まで行なわれた。日本における宗教的意味形成や意味価値、宗教性発達の実証的な研究の知見の蓄積がまだ少ない状況のなか、これらの研究結果から、世界や出来事に宗教的意味づけをしていく宗教性発達についての貴重な知見が得られたものと評価された。

（２）宗教という現象を扱う宗教学、神学、社会学とは異なる心理学的アプローチに基づく諸知見により、宗教性発達心理学の分野だけでなく、心理学の他分野の諸知見との関係を模索、統合していること。

本研究で明らかになった「宗教性の発達は、宗教的意味システムの形成過程である」という前提で、その構造と機能を明らかにした諸知見は、人が、意味を作り出そうとする動物であり、意味の世界に生きる人間を理解するうえでも、心理学の他領域においても重要な問いであり、それらの領域に一定の貢献があったと考えられる。「意味」は、心理学、とりわけ文化心理学の中核的概念である。文化は記号の総体であるが、その記号の読み解きは人によって、また同じ人でも時空の範囲においても異なっているが、その記号の読み解きそのものが意味形成と捉えることができる。心理学的アプローチでは宗教を宗教的意味システムの発達モデルとして、意味形成や意味価値との相互の影響性を検討してきたが、本研究において宗教的意味システム形成には、祈りが「媒体」として重要であることが明らかにされたことの意義は大きいと考えられる。そして祈りのプログラムの一つである『霊操』は宗教的意味システムの形成を促進するもので、その構造と機能の分析から明らかになったのは、心理学的な観点からは過去・現在・未来と、時空を超えるメンタルタイムトラベルであり、社会的視点調整能力の発達を促すものであるという示唆、知見である。そして、その宗教的意味システムの意味処理の際に、トリガーのひとつになるであろうと考えられる自我体験においても、過去・現在・未来という時空を超えるメンタルタイムトラベルや社会的視点調整能力が包括されているとの示唆は、まさに、自我心理学、そして文化心理学の知見と軌を一にするものであろう。その意味で、本研究の成果は、単に、宗教的意味システムの発達を明らかにしただけでなく、私たちが日常を生きるなかで生まれるさまざまな問いを、自己を知り、他者に開かれた自己、共通善に向かうことを通して、人生の意味と目的の追究に関わる問いに繋げていくということこそ、自我発達の過程を示唆するものとして、宗教性発達心理学と自我心理学、文化心理学の諸知見とを統合した成果となっていると考えられる。宗教性発達は、意味を生き、自己と世界の理解を宗教的に解釈することと捉えることが出来るという本研究の成果は、信仰を持たない者にとっても人生の意味を見出していくことは、意味の世界に生きる人間の成熟への歩みであるとの本研究の主張は、新鮮なものと言えよう。

（３）宗教性発達の過程を仮説化する際に採用された質的分析の多様性

宗教性発達の中核である「祈り」という媒介的活動を明らかにするうえで、本研究では、まず、質的分析を通して、宗教体験をした個人への面接や文献という多様な分析対象を、その現象の心性の記述を行うために、適切かつ多様な分析手法を採用して仮説生成を試みている。具体的には、面接資料に対する TEA（複線経路・等至性アプローチ）、文献資料に対するプログラム評価法、IPA（解釈学的、現象学的アプローチ）、テキストマイニング法などが駆使されている。さらに、仮説検証にあたって採用された質問紙法に基づく分析は、質的分析法に対応したものが使われて

おり、研究法を研究目的に対応して使い分けていることの意義は大きいものと考えられる。

（４）本研究の課題

本研究は、宗教性発達の根幹である宗教的意味システム形成過程の構造と機能を明らかにするという目的で、研究１～６を駆使しながら分析を行っているのであるが、しかしながら、本研究にはいくつかの課題も残されていることが指摘された。

１つめの課題としては、カトリック教会は多様な伝統的な祈りの歴史を持っており、「霊操」はその一つに過ぎないことである。本研究では、「霊操」による宗教的意味システム形成を見ているが、例えば「ロザリオの祈り」や「９日間のノベナ」「執り成しの祈り」などの祈りにも深い霊性があると指摘されている。当然、祈りの目的が異なることから、祈りによる心の変容過程も異なると考えられる。また、仏教からは一般化されたマインドフルネスといった瞑想法が話題となっている。カトリック教会においても「祈り」を特定の宗教団体のものにせず、祈りの一般化を検討していくことが望まれるとともに、本研究においても残された課題であると指摘された。

２つめの課題は、今日のカトリック校における建学の霊性の継承についてである。本研究では、カトリック校の一つとしてイエズス会学校を取り上げたが、各カトリック校にはそれぞれの修道会を母体とした建学の霊性がある。学校運営に携わる修道者が減少していくなかで、それは信徒または、信者でない教職員との協働という体制を整えることで可能なのだろうか。この研究の発展として、カトリック校の霊性や今日的な教育の意義を検討していく必要があるであろう。

３つめの課題としては、心理学的アプローチは本研究の対象となる神学の領域でアカデミックな協働が出来るかという点に関する考察が十分とはいえないという指摘である。宗教的現象としての信仰や宗教教育を社会学、心理学、教育学との協働で検討していくことが今後、望まれているとしながらも、伝統的に哲学を基盤とする神学は心理学の方法論に疑念を示す傾向がある。今後、学際的な研究を発展、深めていくうえでも、本研究で扱ったような宗教性発達や宗教的意味システムを神学的な側面からも説明が可能となるように神学、宗教学、心理学の知見の交流を図っていく必要がある、ことが指摘された。

しかしながら、以上のような残された課題があっても、今後の研究課題の出発点としての意義を認め、今後の議論、検証につなげていく展望をもつものであることを確認するとともに、最終的には、課程博士論文としては十分な要件を満たしていることを確認した。

以上により、審査委員会は本論文が博士（心理学）の授与に値するものと認めた。